# キモ男　カンバ〜〜ック♪

タゴサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キモ男　カンバ～～ック♪

【Ｎコード】
Ｎ８１５１Ｚ

【作者名】
タゴサク

【あらすじ】
前作のゼロのキモ男さんのカンバックモノです。

## キモ男さん、再び。（前書き）

前作のゼロのキモ男さんのカンバックモノです。
煮え切らなかったハーレムルートとか、その他を改めて見ます。
ヤケでルイズも面倒見ますよ。エエ。
ツルペタ、巨乳、ロリに年増バッチコイの変態ＳＳ目指します。

## キモ男さん、再び。

・・・・・。
オレの名前を知ってるかい？
ヤマダタロウと言うんだぜ。
人生二回目の引き篭もり、誹謗や中傷にゃ負けたけど・・・。
やっぱりルイズに召還だぁぁぁぁ・・・。

タロウです。
皆様、オイラの事を覚えてるか？
一回人生を完全に終わったのに、またタロウしています。テへっ♪

さて、現状を説明しますと・・・。
広い草原があります。
私は先程まで自分の部屋に引き篭もってネットしてました。
手元にはノーパソもあります。
お気に入りのフュギィアさんも大切に懐に入れてありますよ。
ええ、ゼロ魔２０巻のあのテファたんです。
で、目の前にいらっしゃるのが・・・。
ツルペタツンデレ爆発桃髪さんです。
そう、ルイズですよ。

はぁ・・。またですか・・・。
ネ申様、居るのでしょ？
また使い魔ですか？

（タロウよ、カンが良いのぉ。）

もう慣れました・・。
今回は死ぬまで引き篭もり続けるつもりだったのに。
どうして引き篭もらせてくれなかったのですか？

（イヤ・・ヒマになったから・・では無いぞ。
設定の都合とだけ言っておくわい。）

ナニやらゲフンゲフンと言う声もしますが、作者さんよ。
アンタ、ゼロ魔は卒業するって言わなかった？
おかげでオラは安心して引き篭もりが出きると思ってたのに。

しかし・・どうするべ・・。
ルイズの性格は記憶していますよ。
ですが、また面倒見るかと思うとね・・。
気持ちが萎えてしまいます。
ネ申様、今回のスペシャルプレゼントはどうすんの？
正直、チートよりも現代化学が使える方がオラは嬉しいのですが。

（タロウよ、この脆弱なハルケギニアで現代化学が通用するか？
ムリだろ・・。
拠って今回のスペシャルプレゼンツは・・・。）

ドキドキドキドキ♪

（前回同様、全系統魔法のチートアーンド魔力無制限としまぁぁす。
コレで頑張れるでしょ？別に嫌いなヤツは相手しなくてもこの世界
では生きて逝けるヨン。
頑張ってね。タロウ。）

おぉぉ。最初から飛ばしてくれますな。ネ申様。

そう言えば転生してからは、何故か前世の現世同様。
全くモテないクンでしたが。
もしかして現世に未練が無い様に仕組まれてた・・のですか？
ネ申様・・・・。

（ヒューヒュー、ワシは何も知らないモンね。詳しくは作者にでも聞いてチョ♪）

ヤツが教える訳が無いでしょ。
はあ、じゃオラはこの世界で・・・・。

ハーレムを目指します。
食える女は全て食ってやるぅぅ。

（おお、遂にタロウからハーレム宣言が。
ガンガレよ。そんだけのチートがあればハーレム達成も難しくは無いでしょ。
んじゃワシは用が終わったので消えるヨン♪
ネットは前作同様神ネットと契約しといたからね。
好きに使ってチョ♪
ばいばいき~~ん♪）

ネ申様は何時ものバイキンバイバイを言うと霞の如く消えてしもた・・。

そろそろ桃髪が爆発する頃か・・・。

「チョッと・・アンタ・・。
いい加減にコッチの話を聞きなさいよ・・・。」

「そう言う貴様は誰だ。余をこの様なド田舎に拉致しおって。」
オレはそう言うと、ツルッパゲ先生の頭に即効魔法アデランスを唱えた。
瞬間、彼の寂しい頭はボン♪と言う音と共にフサフサの髪の毛が。
「お、おぉぉぉぉ。私の髪が。
貴方はメイジですか？いいえ、きっと神様なのでしょう。
長年の私の苦悩が貴方の魔法で・・・。」

「フム・・。何やら貴殿から頭が寂しい寂しいオーラが出てたので、
つい余の魔法で
フサフサにしてしもたが。
不味い事でもしたかな？」

「いいえぇぇ。ありがたい事です。
あっ、私はこの魔法学院の火の魔法教師をしています、ジャン・コルベールと申します。
もし宜しければお名前をお伺いしたいのですが・・。」

「それは構わないが、まずこの状況を説明して貰おうか。
余はタロウ・ヤマダ。
この世界とは違う世界の魔法使いの教師をしておる。」

「誠ですか？でも私では出来なかった髪の増殖魔法を見た感じでは信じるしかありませんね。
いえ、世界が信じなくても私は貴方を信じます。
貴方こそが私の求めてた究極のメイジ、魔法使いですよ。
タロウ・ヤマダ様。」

何かコルベールさん、随分とフレンドリーですね。
狙った訳ではありませんが、あの方は敵にしたく無いのですよ。
この世界には当然おマチ姉さん、居ますよね。
彼女こそが自分の人生でも最高の姉さんでした。
彼女と過ごした生涯は本当に幸せでした。
この世界のマチルダも必ず・・。キリッ♪
幸せにしますよ。エエ。

さて、ルイズの仕込みでもかかりますか。
アレでも一応はこの世界のメインキャラです。
潰すとなるとアンチになりますから、適当に幸せにしましょ。
でも・・この外見では・・。

ピカっと閃いたのは、もしかしたらこの世界はアノ世界の続きでは無いか？
と言う事です。
試しにあの方を呼んで見ましょう。

「アクア姉さん♪」

（呼んだか？タロウよ。）

やはりこの世界はアノ世界の続きでした。
呼んだら来るもんな。

「久しぶりです。○○○さん。（真名なので伏字です。）
久しぶりにこの世界に来たのですが、体系がアレなのですよ。
何とかかつての体系に戻して頂けません？」

（造作も無い事よ。タロウ。

フム・・・。コレで良いか？）

見ると醜かったお腹もスリム。
記憶の中に残ってる一番ベスト時代の私の体系となってたのです。
やはりアクア様は私の最高の女神様です。
感謝しるですよん♪

（・・・あまり褒めるな。タロウ。
照れるでは無いか・・。）

「おぉぉ、○○○様がデレた。
今回も世話になります。」

（任せるのだ。タロウよ。
お前が帰った事は他の精霊にも告げておこう。
フフフフ。
楽しみにしておけ・・。）

水の精霊、アクア様は何やら不気味な事を仰ってましたが・・。
ま、良いでしょ。
おかげでメタボから開放され、身体の軽い事♪

ん？？？？？？

皆様、どうしたのですか？
金魚みたいに口をパクパクさせて・・。

「タ、タ、タ、タ、タ、タロウ様、貴方様は、水の精霊様とお知り合いでしたか？」

「ン??ああ、あの方は以前からのお友達ですよ。
それがどうかしましたか？」

縦ロール髪のおぜう様は何やら言いたそうですな。
あれは・・・。
モンモンだ、確かに。

「あ、あのぉぉ。タロウ様で宜しいでしょうか？
私はモンモランシー・マルガリータ・ラ・フェール・ド・モンモランシーと申します。
長いのでモンモランシーと呼んで頂けると幸いです。
所で・・・。
先程、タロウ・ヤマダ様がお呼びになられた方は、この国で水の精霊様と呼ばれる存在ですよね？」

「多分、そうだと思うぞ。余は昔からの知り合いだけどな。」

「精霊様とお知り合いですか・・・。
あのぉぉ、精霊様にお願いとか出きるのでしょうか？」

「そりゃ頼めば出きるぞ。だが、それがお前に関係あるか？」

「い、いいえ・・。私の実家は水の精霊様の盟約の一員として、トリスティンで働いていました。
ですが、私の父があの方に粗相を働いてしまって、盟約の一員から外されてしまったのです。」

「ふーーん、可愛そうだね♪」

「ですので、タロウ様があの方に取り成して頂けないか・・・と。」

「だが断る。
余はこの国に拉致されたばかり。
自分の国に帰る術も無くした今の状態で、他人に構う余裕は無し。
ああ、忘れてたな。
そこの桃髪。
この責任はどう取る気だ？」

いきなり話を振られたルイズはパニクってしまった。
コルベール先生の頭に毛が生えたり、メタボのアレがいきなりスリムになったり、
水の精霊が出現したりと頭がオーバーヒートしてたのである。

「わ、私は・・・。」

「タロウ・ヤマダ様、お待ちください。
私がこの場の責任者です。どうか怒りを納めて頂けませんか？」

ルイズに話をさせると、場が崩壊すると判断したコルベールが話しに割って入る。
中々良い判断ですね。
コルベールさん。

「フム・・。確かに「お子様」に責任取れと言ってもムリだな。
良かろう。コルベールさん。貴方と談判しましょう。」

「チョッ、お子様って誰の事よ。」

「そこに居るのは自分のケツも拭えない子供だろ？
乳ナシ娘さん♪」

「フンガーー、乳なんて関係無いっしょ。」

「まあ素材は悪く無いのに、そんだけ乳が無ければ女として見込みゼロですな♪
自分に任せれば乳くらいは成長させれますけど♪」

オレはそう言うとセクハラマジーックと叫び、モンモンに対し乳促進魔法を発射。
いや、ネ申様。

今回のタロウは一味違いますね。
イメージ通りにモンモンのツルペタが見事な形の乳に成長♪

「わ、私の胸が・・・。
ありがとうございます。タロウ・ヤマダ様。」

「アラ？もう一人のツルペタに発射するつもりが間違えてしもた。
返してくれる？」

「イヤです。長年の悩みが解決したのですわ。
この胸は私だけのモノ。嗚呼、嬉しい♪」

モンモンは自分の成長した胸を大切に抱きかかえ、悶絶してた。

「チョッ、洪水のモンモン。その胸は私のモノよ。
私に渡しなさい。」

「絶対にイヤ・・。コルベール先生、胸がとてもキツイので早退しますね♪」

「あ、ああ。分りました。モンモランシー嬢・・・。
しかしタロウ様の魔法は凄いですね。
ハルケギニアの魔法とはケタが違います。」

「この世界の魔法を見た事は無いが、この程度なら余の生徒なら誰
でも出来たぞ。
（大嘘）。」

「素晴らしいですね。私も貴方に師事したいと思う位です。」

「若くないとムリですよ。それに私の勤めてた学校の生徒は、全員
が魔力満点で
無いと入学試験すら受けられません。
見た所、この学院の生徒は私の受け持ってた生徒と比較するのもバ
カバカしてレベルの
生徒ばかりです。先生も大変ですね・・・。」

実際にトリスティン魔法学院は幼児に魔法を教えてるのと同じレベ
ル。
ロクな教育を受けていないガキばかり。
だから滅びそうになるのよ。
多分・・・。

その後、召還会場でグダグタしてても仕方ないので、
変態校長オスマンに交渉に行く事になりました。

コルベールさんは頭がフサフサでニコニコしておられます。
今、この瞬間にメンヌベルに殺されても笑いながら逝けそうですね。
ツルペタツンデレ桃髪は、ワテ等に付いて来ながらも、何で私の胸

を・・・。
とブツブツ呟いています。
アーアー、聞こえません。
またオスマンと遭うのか・・。
今度の人生はもう好きに生きる。
行き当たりバッタリで生きます。

## キモ男さん、再び。（後書き）

本作は原作とは殆ど話の筋が変わります。
一応、原作に従い話を進めますが、キャラは別物となります。
原作崩壊となりますので、原作萌えの方は見ない事をお勧めします。

## 変態校長とキモ男さん♪（前書き）

オスマンとの対決です。

## 変態校長とキモ男さん♪

「ヒマじゃのぉぉ。」

「オールド・オスマン。
ヒマだからと言って私のお尻を撫でるのは止めて貰えませんか？」

「いい天気じゃのぉぉ。」

「ボケたフリしてもダメです。
その手をどけてください。」

「真実はどこにあるのかのぉぉ。」

「少なくとも私のスカートの中にはありません。
机の下にネズミを忍ばせるのは止めて下さい。」

「モートソグニル。気を許せる友達はお前だけじゃ。」
オスマンはネズミにナッツを与え齧らせている。

「そうかそうか。もっと欲しいか。ほれやるぞ。
所で今日の下着はナニ色じゃった？」

チュウチュウとネズミが何やら言ってる。

「そうか、白か。たまにはショッキングピンクとか黒も良いがのぉ。
今度秘書経費で下着を・・・。」

オスマンは最後まで言えずにロングビルからアッパーカットを食ら

ってた。

「ナ、ナイスパンチじゃ。ぐふっ・・・。」

「オールド・オスマン変態校長、今度やったら・・・。
コレでは済ませませんわ・・・。」

ロングビルは両手を組み合わせバキバキと指を鳴らせてる。
オスマンは首をカクカクと震わせ、イエス・マムと答えるのみだった・・・。

タロウです。

いよいよやって参りました。
この世界最強の変態。
オールド・オスマンの居る校長室です。ハイ。
でも避けてはいけません。
ヤツを避けるとマチルダ姉さんと知り合う事が出来なくなります。
今回も土くれのフーケは出しませんよ。エエ。

テファのためにもね。

「オスマン校長、コルベールです。
召還の儀式でトラブルが出ましたので、ご相談に上がりました。」

「コルベール君か？
良かろう、入りたまえ。」

オスマンの許可が出たので、コルベール、ルイズ、そしてオラが校長室に入る。
中にはロングビルさんこと、マチルダさん、オスマンが居た。

「そこの方はどなたかな？」

「オスマン校長、彼は異国の凄いメイジです。
見てください。私のこの頭を・・・。」

オスマンは目を見開いて驚いてた。
あまり男の顔は見ないので、気づかなかったが、ピカピカ頭がフサフサとなってるのだ。
そりゃ驚くってモンです。

「ツルベール君がフサフサ君になっとる。
どうしたのだ？その頭は。
悪いモノでも拾って食べたか？」

「ココにいらっしゃるタロウ・ヤマダ様の魔法でこうなったのです。
嗚呼、若き日の私の頭が蘇るとは・・・。」

オスマンはコルベールの頭を触ったり毛を抜いたりして確かめてた。

「痛いではありませんか。校長。」

「スマンスマン。ホンモノか確かめて見たくてのぉ。
だが毛根もある。まさにホンモノだ。」

「この方ですが、ルイズ嬢の召還の儀式でこのハルケギニアに呼び寄せられたそうです。
異国の魔法学院で教鞭を取られてたそうですよ。
素晴らしいメイジです。」

「フム・・。確かにコルベール君の頭が自毛になってる。
昨日までは光輝く寂しい頭だったのだがのぉ。
おお、挨拶が遅れてたが私がこのトリスティン魔法学院の校長、
オールド・オスマンじゃ。貴殿の名を宜しければ教えて頂けぬか？」

「始めまして。
ニホンと言う国で教師をしていましたタロウ・ヤマダと言います。
趣味は魔法と・・色々です。」

「色々と言うのも気がかりだが・・。
して、貴殿はどうしたいのじゃ？」

「まず帰る方法が分るまでの生活保障をお願いします。
使い魔にはさすがになれませんが、代わりにルイズ嬢には使い魔の代わりとなる
異界の動物を進呈致します。」

「へ？？私に使い魔となる動物をくれるの？」

「人間の使い魔よりは勝手が良いでしょ？ルイズ嬢。」

「そりゃそうだけど。でもドコに居るのよ。」

「後で召還したるで待て。小童。
して・・。そこにいらっしゃる美しいおぜう様。
貴女様からは何か悲しい波動を感じるのですが。
もしかしてイヤな事を無理強いされていませんか？」

「へ？？私ですか？」

「ハイ。メガネをかけた美しい年頃のおぜう様は貴女だけです。この場では。」

「ま、嬉しい事を。でもどうして私から悲しい波動を感じるのですか？」

「私の世界には「セクハラ」と言う女性に痴漢行為をする男性が後を絶たないのです。
女性をモノ扱いして、勝手な事ばかり無理強いして逮捕される連中も多々。
そう言う被害に遭われてる女性と同じ悲しみが貴女から感じられるのです。」

「ま、お優しい事を。そうですわね・・・。」

ロングビルは黙ってオスマンの方をジロリと睨みつけている。

「ナルホド・・。恐らく秘書と言う弱い立場の貴女にヒヒジジイが無理やりセクハラを

しているのですね。分りました。
貴女の苦しみをヒヒジジイにも味わせてあげましょう。少しお耳を拝借して宜しいですか？」

ロングビルはハイと言うとタロウの口元に耳を傾ける。
オスマンは何やら怪しい雲行きとなり汗ダラダラ・・。

「フフフフ。面白い事ですわね。
分りました。タロウ・ヤマダ様、お任せします。」

「ラジャです。では・・。
オールド・オスマン。立てぃぃ。」

気合を入れた声を上げると、オスマンは自分の意思とは別に直立不動の姿勢を取らされた。

「な、ナニが始まるのじゃ。」

「楽しい事ですよ♪」

オレは即席魔法、セクハラチェンジを唱える・・。
すると・・。

オスマンの立ってた位置には十六位の見目麗しい女性が。
そしてロングビルさんの立ってた位置には逞しい男性が。

「ロングビルさん、彼女に女性のイヤな事を散々味わせてください。
オスマンコちゃん、頑張って耐えてね♪」

「わ、ワシがおんにゃの子に・・。わーい。触り放題だ~~い。」

オスマンは喜んでいるが、それからが地獄の始まりだ。
男性にあるべきイチモツも消えているのに自分にセクハラしても痛いだけ。
そしてキモチワルイのだ。
ロングビル氏はオスマンコちゃんに近づくと・・・。

「オスマンコちゃん、カワイイわね。ゲヘゲヘゲヘ・・・。」
と、鼻息も荒く近づき、触るわ、叩くわ、揉むわとムチャクチャしまくり。
オスマンコも最初は喜んでたが、段々恐怖に変わり・・・。

「もうイヤ~~~，元に戻してぇぇぇ。。」

「ダ・メ・です。女性のセクハラの苦しみはこの程度ではありませんわ。
私、イヤ今はボクの苦しみを思い知れぇぇ。」

ロングビル氏は更にオスマンコに触る触る。
仕舞いには彼女は失禁してしまい悶絶して気絶。

「ふぅ・・。この程度で良いわね。
タロウ様、ありがとうございます。そろそろ元に戻して頂けます？」

「ラジャです。」

オレはセクハラチェンジを解いて、オスマンとロングビルさんを元に戻す。
オスマンは下半身ズブ濡れで気絶してるが、汚いので始末だけはしておいた。

そして活を入れ、オスマンを正気にすると・・・。

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ・・・。」

と正座して土下座を始めた。
余話怖かったのだろう。
世の女性はこんな恐怖を毎日の様に味わってるのだ。
痴漢に憧れてる男性諸君。
痴漢で感じる女性なんて皆無に近いんだからね。
お近づきになりたいなら、キチンと口説いてください。
フラれたら諦めるのですよ♪

さて・・。
オスマンに対するオシオキは終わったので交渉再開です。

「オスマン殿、自分は今、見せたみたいな魔法のほかに色々と楽しい事が出来ます。
ええ、色々とね。」

オスマンは恐怖のため、まだガクブルしてる。
フフフ・・。
いくら長生きしてようが、おんにゃの子になる経験だけは皆無だったろぅ。
ザマーですよ。
ロングビルさんも元の女性の形態に戻り、勝ち誇った顔をしております。

「わ、分りました。タロウ・ヤマダ殿。
もう二度とセクハラはしません。
女性の嫌がる事は絶対にしません。

お許しを・・。」

「オスマン殿、女性に対するセクハラの恐怖、良く分ったでしょ。
二度としてはいけません。今度したら・・。
幼女にしてスラム街に放置しまっせ。」

「もう懲りました。ワシは男のジジイで結構です。
お触りしたい時は、お金を払ってンナ店に行きます。」

「宜しい。じゃ、交渉再開と逝きましょうか♪」

そっからはコッチのペースでした。
始めっから相手の度肝を抜いたので、もう言いなり。
仕事はココの学院の教師に赴任。
一応、全系統が使えるので、手抜き教師を叩き潰して
後釜に座る事にしました。
寝床は自分で建てるので、学院内に空き地を貰います。
食事は学院の教師と共に頂く予定です。
ルイズ嬢の使い魔は明日、校長室で召還する事にしました。
ナニを召還したろうかな・・・。

ま、疲れたので今宵は食事をメイドさんに運んで貰い、貴賓室に休
ませて貰いました。
チャンチャン♪

## 変態校長とキモ男さん♪（後書き）

オスマンコちゃんとロングビル氏の絡み、いかがでしたでしょ。
痴漢はいかんですよ。皆様。
どうしても女性に近づきたい非リア充の皆様は金を払っていかがわしいお店へ。

## マチルダさんとキモ男さん（前書き）

マチルダを引き込みます。

## マチルダさんとキモ男さん

タロウです。
オスマンとの交渉を終えたオラはロングビルさんの案内で、貴賓室へと向かっています。

「タロウ様、今日はとても楽しい体験をさせて頂きました。
本当に感謝しております。」

「ロングビルさん、世の女性の大半はンナヒヒジジイの手篭めにされてるのですよね。
女性は好きな男性のみに身体と心を預けるべきなのに、立場を利用し、
イヤな事をするヤツは後を絶ちません。
もし困った事があれば相談して下さい。
ヤローの相談は、あまり聞きたくありませんが、麗しい女性の相談は最優先でお聞きします。」

「ま、本当にダンディなのですね。タロウ様。
分りました。また何かありましたら是非、ご相談させてください。」

その時、オレは周囲に誰も居ないのを感知してから彼女にボソリと呟いた。

「マチルダさん、土くれのフーケだけは絶対に止めてください。
妹が悲しむ事になりますよ・・。」

それまで温和だった彼女の態度が瞬間的に氷点下に落ちた。

「どこで知ったのかい？」

「私はこの世界は二度目なのです。試しに言いましょうか？
ウエストウッド村の山林の中に孤児と住む彼女の名は・・・。」

「分った、信じましょう。でもどうしてンナ事を私に告げるの？」

「テファを悲しませたくないからですよ。
貴女は絶対に捕まらないと信じてドロをしてるでしょうが、世の中には絶対と
言う事はありません。悪い事してたら必ずお縄になります。
そして前世では私の妻だった貴女を不幸にしたくは無いのです。」

「わ、私が妻だったって？アンタと・・・？」

「ハイ。信じられないでしょうが、事実です。
この世界は不思議な事ですが、輪廻の繰り返しを行ってるみたいです。
その証拠をお見せしましょう。アクア姉さん・・。」

小さい声で呼んだにも関わらず、アクアさんが参上です。

「呼んだか？我が盟友、タロウよ。」

「以前、私がこの世界に居たのは何年位前ですか？」

「もう数えるのもバカバカしい程、昔の事だ。
人間の年月で言うと二千年は経過してるだろう。
お前が消えてからは、我は面白いヤツが居ず、ラグトリアン湖で引き篭もっておった。」

「だ、そうですよ。マチルダさん♪」

マチルダは目の前に居る存在が、普通の霊とかモノでは無い事は理解出来てた。
だが、この存在が何なのか・・・。
理解出来ないで居た。

「あの・・・。貴方様は・・・。」

「我はお前達、単なるモノが言う、水の精霊なり。
我はタロウ・ヤマダとは古くからの盟友なり・・・。」

マチルダはアゴが落ちそうになってたが、もう信じるしか無かった。
目の前の存在はまさに精霊そのものなのだから。

「失礼な事を質問してお許しください。
私はタロウ様の僕となるマチルダ・サウスゴーダと言います。」

「フム・・・。お前はタロウの僕となるのか？」

「ハイ。私はタロウ様に色々と助けて頂きました。
ご恩を返すには私の些細な人生を預けるしかありません。
どうか私の存在を認めてください。」

「良かろう、お前を単なるモノからタロウの僕、マチルダとして認識しておこう。
くれぐれもタロウを裏切るで無いぞ。」

「モチロンです。水の精霊様。」

「タロウ、このモノに我の秘薬を与えておく。
日々の暮らしの糧の足しにはなるであろう。」

「ありがとうございます。精霊様。
また遊びに行きますので、お待ちください。」

「また以前の如く、池のある家を早く持て。
我もそこに移動したいぞ。」

「もう少しお待ちくださいね。自宅を持ちましたら必ず池を作りますので。」

「楽しみに待つとしよう。では・・・。」

そう言われると水の精霊様はブシュッと消えてしまいました。
マチルダの手元には大量の水の秘薬が瓶に入ってます・・・。

「こ、こんな大量の秘薬なんて・・・。凄いお金になります。」

「良かったね。マチルダさん。
それを換金してテファの仕送りの足しにしてください。」

「数年は大丈夫ですよ。こんだけあれば。
ああ、もちろんアレは廃業します。」

「それが良いですよ。あ、部屋はココですよね。
じゃお休みなさい・・・。」

オラは部屋に入ろうとすると、マチルダさん、ガシッとオラの腕を

掴んで放しません。
どったの??

「タロウ様、私は貴方の僕となったのですよ。
私のすべては貴方のモノ。何故離れようとするのですか・・。」

ヤバ・・。
ヤンデレ化が始まってる。
前世の時もこの目になったら、逆らう事が出来なかったのら。
しかし、着いたその夜に女性を部屋に引き込むのはさすがに・・・。
それに腹が減りました。シクシク・・・。

そいから仕方ナシに彼女の言うがママに自分の部屋に入り・・・。

ゲフンゲフン・・・。

お子様には知らせたく無い事になりました。
腹がグーグー鳴ったので、手元のカバンに残ってたポテチを食べてたら、
彼女に奪われたのは言うまでもありません。

・・・・・・。
そうだ♪
オラはネ申様から魔法に関してはチートにして貰ったのら。
腹が減ったなら、食べ物を魔法で何とかデキネか?
試して見ます。

「カップメンと箸、ついでにカセットコンロとボンベ出ろ!!」

出ましたよ。すべて・・。

マチルダさんもビックラしてますが、食べ方が分らないので目を白黒させてるだけです。
オラは腹ペコタヌキなので、ヤカンに水を足し、コンロでお湯を沸かします。
そしてカップメンにお湯を足し・・・。
三分待つと・・・・。

おぉぉぉ。ビバ、カップメン♪
マチルダにも食べ方を教え、一緒にズルズルと食べます。
彼女は初体験のカップメンに感激し、ンナ美味いの初めて♪と大騒ぎです。
腹が膨れたので寝ようとすると・・・。
狼さんに食われてしまい明け方まで寝かして貰えませんでした。シクシク。

寝不足でも水魔法で何とか出来てしまう自分が悲しいっス。
翌日、彼女は肌がツヤツヤしてたのは言うまでもありません。

## マチルダさんとキモ男さん（後書き）

ギリギリR15です。
マチルダさんはタロウの僕となりました。

## シエスタさんとキモ男さん（前書き）

ようやくシエスタさんと出会います。

## シエスタさんとキモ男さん

タロウです。
マチルダさんは夜明け前に自分の部屋に帰りました。
ええ、さすがに昨日と同じ服では不味い、と、帰ったのです。
私は彼女が部屋を出ると同時に部屋の換気を始めました。
男と女のアレの匂いってかなり篭るのですよ。
風魔法ですべての空気を外に出し、部屋の空気はスッキリです。
さて・・。
着替えが無い事にようやく気づきました。
今、着てるのは何故かスーツ・・。
パジャマ代わりのジャージは所持してますが、下着がありません。
困りました・・。
何とかしないといけません。

ぐぅぅぅ~~~~~・・。

オラの腹の音です。

昨日はカップメンしか食べてませんからね。

そろそろマヂで胃袋様に本格的に補充してやらないとかなり不味いっス。
昨日はゲフンゲフンな事ばかりで肝心な事を頼んでおくのも忘れてました。
どうするべ・・・。
悩んでると、部屋のドアをノックする音が・・。

「どうぞ。開いてますよ。」

「失礼致します。コチラはタロウ・ヤマダ様のお部屋ですね？」

「その通りです。どちら様ですか？」

「学院のメイド、シエスタと申します。朝のお食事をお持ちしました。」

おお、シエスタさんキタ~~~~♪

マチルダさんに続く私の元奥様。

やはりこの世界は輪廻して繰り返してますな。

ですが、何もかも前世と同じに動いては面白くありません。

今回は成り行き任せと決めています。キリッ。

「ありがとうございます。どうぞお入りください。」

シエスタは了承を得ると台車に乗せた食事を部屋に運び込む。

・・・・・・。

ヲイヲイ、ナニ？？この膨大な量は・・・。

またメタボに戻す気かよ・・・。

台車の上には朝食にしては膨大な量の食事が乗せられています。

聞くと、これが貴族の方の朝食一人前だそうです。

あのジジイ、よほど怖かったのか、オラの扱いが前世とはケタが違います。

やはり変態は叩くに限りますね。ウン。

「シエスタさん、私一人では片付ける事が出来ません。

もし朝食がまだならご一緒にいかがです？」

シエスタはアワアワと慌てて、ご迷惑で無ければ・・と、了承してくれました。
それからは楽しいランチタイムです。
やはり元のシエスタと同じ人格らしく、記憶とすべてリンクしています。
しかし見ると手荒れが凄いです。
洗濯機も無い、この世界ですから洗濯は当然、手作業。
荒れるのは当然でしょう。
見かねたオラは彼女の了解を得てから、手荒れを魔法で癒してしまいました。
すると、アラ不思議・・。
彼女の荒れてた手の肌は赤ちゃんみたいにスベスベで綺麗になりました。

「こ、こんな事をして頂いて、宜しいのですか？」

「あ？
いいえ。こんなの自分には造作も無い事です。
何でしたら手荒れの惨いメイドさんを全員連れて来て頂いても結構ですよ。
女性が荒れた手をしてるのは人類の損失です。
後でハンドクリームを作りますので、仕事の後に塗る習慣を付けてください。」

彼女は感激して、私に出きる仕事はすべてお任せください、と、直立不動の姿勢で
私に敬礼してくれます。
ドコで覚えたの？海軍式の敬礼。

まあハンドクリーム程度なら、今すぐでも作れます。
イメージさえ出来れば大概の事は出きるのですよ。
私は。
ただ、女性の下着とかは想像の埒外です。
お食事の後に人数分のハンドクリームを創造してあげ、彼女に手渡します。

「こ、こんなに・・。私たちの給与ではこんな秘薬の代金は払えません。
どうすれば・・。」

「お金なんか要りませんよ。貴方達は学院のために働いてるのです。
自分も本日からは学院で働く、言わば同僚。
同僚の健康維持も仕事の一環ですよ。」

そう言うと彼女は喜んで受け取ってくれました。
後に聞くと、彼女の同僚も凄い手荒れに悩んでたとか・・。
クリームを塗り始めたら、全員がアカギレから開放されたそうです。
良かった良かった♪

シエスタさんとのファーストコンタクトはこの程度にしておきましょう。
いくら何でも始めからゲフンゲフンな関係はあり得ません。
いえ、ありましたが例外としておきます・・・。

シエスタさんと別れ、部屋の外をブラブラと散歩する事にします。
忘れてましたが、私の魔法は一応、杖を使っています。
ホントはイメージしてるだけなのですがね。
それでも魔力が枯渇しないのですから、ネ申様。
どんだけ魔力をプレゼントしてくれたのですか？

学院の閑静な木陰を見ると、タバサさんが本を読んでおられます。
相変わらずクーデレしているのですね。
ま、今は関わらない事にします。
ボチボチ学院の生徒もアルウィーズ食堂で朝食を食べ始めたらしく、
生徒で賑わっています。
オラは食べたので、行きませんが・・。
当座の着替えが無いので、オスマンに談判に行く事にしました。

「オスマン校長、おはようございます。タロウです。」

「タ、タロウ殿か。セクハラはしてませんぞ。エエ。
もう二度としませんぞ。エエ・・。」

「別に問い詰めに来たのではありませんが・・・。
ま、良い傾向です。
所で・・・・。」

端折りましたが、下着と着替えは大至急部屋に届けてくれるそうです。
ついでに支度金として、相当の金子を袋入りでドカンと置いてくれました。
今日の予定は授業の見学、ルイズの使い魔の召還などです。
授業は手抜きのアホ教師が居たら潰してＯＫと許可を貰います。
万一に備え、オスマンのサイン入り許可証も発行して貰いました。
こんな変態でも学院のトップです。
大切に使いましょう。

オスマンと別れ、自分の居室である貴賓室に帰るとシエスタが下着等を持って待ってました。

「タロウ・ヤマダ様、オールド・オスマン校長の指示がありましたので、
着替えなどをお持ちしました。」

「ありがとうございます。シエスタさん。では着替えますので、その服を頂けますか？」

「裾合わせがありますので私が調整します。裁縫道具も持参してますわ。」

見ると、裁縫セットもドカンと置いてあります。

「・・・・分りました。では・・・・。」

シエスタを伴い部屋に入り、まずは下着を着替えます。
もちろん彼女には向こうを向いて貰っていますよ。
まだ彼女は清い乙女なのです・・。
そして上着を着てズボンを履きます。
やはり少し裾が長いですね。

「シエスタさん、着替えました。」

「やはり調整が必要ですね。では裾を合わせますので、任せてください。」

彼女はそう言うと、オラの足元にしゃがみこみ、裾を合わせてくれてます。
←を見ると・・・・。

ゲフンゲフン。
彼女の双壁の谷間が見えます。
ええ、偶然見ただけですよ。絶対にガン見はしてません。
それに昨日は散々ゲフンゲフンな事は済ませています。
ですので冷静ですよ。エエ・・。
後に彼女と深い仲となってから聴くと・・。
狙ってたそうです。自分が谷間を覗く事を。
女性はターゲットを定めると攻撃に入るのが早いですね。
男には真似出来ません。
後に私はそう述懐しております。

裾あわせは十分程度で終わりました。
さすがプロです。ハイ。
ミシンも無いのに、この技術。
・・・・ミシンか・・・。
彼女と暮らしてた時、彼女には色々と洋服を縫って貰いました。
あの時は創造魔法が使えなかったので、手縫いでお願いしてましたが。
ついホロリと思い出してしまいました。
すると・・・・・。

目の前に足踏み式の旧式ミシンがデンと出現したのです。
想像しただけなのですよ。
自分も驚きました。

「あ、あのぉぉ。タロウ様、コレは何でしょう??」

「私の世界の古い形式のミシンと言う足で踏む事で衣服を縫い合わせる事の出きる機械です。」

オラはシエスタに使い道を教えてあげました。

「素晴らしいですわ。こんな機械があれば服を縫うのも簡単に出来ます。」

「では貴女に差し上げますよ。自分が所持してても意味はありませんから。」

「こんな高価な品物、頂けません。今朝の秘薬の代金も払えないのに。」

「アレは御近づきのプレゼントですよ。代金は結構と言ったでしょ。そうですね・・・。
ではこうしましょう。このミシンで色々と服や下着を縫ってください。
もちろん私以外の方の服もＯＫですよ。
それで代金は帳消しとします。
いかがです？シエスタさん。」

「・・・・分りました。
ではお預かりしてタロウ・ヤマダ様の服や下着は私に任せてください。
ご満足頂ける品物を作りますので。」

「楽しみにしてますよ。ああ、そう言えばコレを運ぶのも大変ですね。
私の魔法でシエスタさんの部屋に転移させますので、私の手を握って部屋を
思い浮かべてください。
目は瞑ってくださいね。」

彼女は私の指示に従い、手を握って目を瞑ってくれました。
次の瞬間。
一瞬で彼女の部屋に転移・・・。
同僚のメイドさんがビックラしたのはお約束です。

## シエスタさんとキモ男さん（後書き）

シエスタとの出会いでした。
まだゲフンゲフンな関係は考えてませんよ。
ええ、彼は鬼畜ではありません。
変態ですが・・。

## 風ヲタとキモ男（前書き）

風男との対峙の巻きです。

## 風ヲタとキモ男

着替えた服の洗濯などをシエスタに頼み、オラは授業の見学をするべく職員室に向いました。
丁度オスマンも職員室に来てたので、彼にオラの説明をして貰います。

「職員諸君、今日から我が学院の教師として赴任して頂く事になった異国のメイジ。
タロウ・ヤマダ殿です。
彼の魔法の腕はこのオスマンが保障する。
彼には得意の魔法はすべてと言われるので、彼に自分の受け持ちは自分で決めて頂く事になった。
諸君の中で手抜き授業をしてる方が居たら最優先で解雇する事に決まった。
そんな職員が居ない事を願うがね・・。」

職員はオスマンの一言でザワザワと騒ぎ出した。
新規の職員が入るのは良いが、解雇される人間が出る・・。
今まで生温い仕事をしてた彼等は真っ青となってた。

「始めまして。私は異国の魔法学園で教鞭を取ってましたタロウ・ヤマダと申します。
何分にもこの国の常識に疎いと思いますので色々とお世話になると思います。
ヨロシク♪」

何故か彼等からスルーされましたが、歓迎されていないのは当然です。

ま、誰を切るかはオラの一言ですので、楽しみにしていましょ。
最初の授業はルイズのクラスです。
教師は風ジャンキーのミスタ・ギトー。
この世界でも風最強と騒いでいるのでしょうね。
まずはヤツを切りますか・・。

「では授業を始める。
今日は異国のメイジとか言うタロウ・ヤマダ殿が居られるので彼に
模擬魔法を
見せて貰うとしよう。
タロウ・ヤマダ殿、お願い出きるか？」

いきなり話を振られたが、ま、予想してましたので落ち着いて返答
致します。

「分りました。
皆様、始めまして。
異国の魔法学院で教鞭を取っていましたタロウ・ヤマダと言います。
今日はミスタ・ギトー殿から模範魔法を見せてくれと頼まれました
ので、
皆様にお見せしましょう。
ですが・・、ココでは少し不味いですね。
ギトー殿、野外に移動しても宜しいですか？」

「構わぬが・・。では諸君、野外に移動する。
ヴェストリの広場に移動しよう。」

ギトーがそう言うと生徒は全員席を立ち広場へと移動を始めた。
オレはギトーと並んで歩き、彼と少し話をしてた。

「タロー殿、どう言う魔法を見せてくれるのですか？」

「そうですね。教室では部屋を破壊してしまうと思いましたので、
室外に移動して貰いましたから、
私の作るゴーレムをギトー殿の得意な魔法で破壊すると言うのはいかがでしょ？」

「ほほぉ。それは楽しそうですね。
私の風を見せて差し上げます。」

「楽しみにしてます♪」

やがて学院の外れにあるヴェストリの広場に着くと、生徒に安全な場所に固まって見学して貰い、
オレはゴーレムを練成した。
形は・・・。
そう、子供時代に熱中した日本独自のスーパーロボット。
どこかの国がテコンとか言う捏造品を作ったが、世界の子供が支持した・・・。
マ〇ンガーZです。

「いかがでしょ？私の作った最強のゴーレムです。」

「な、中々強そうですな。ですが私の風には残骸となり果てるのが見えております。」

「もう攻撃して結構ですよ。いくらでも攻撃してください。」

ギトーはオレの話が終わると同時に偏在を作りカッタートルネードやタイフィーン、

その他自分の持つ魔法を全力でぶつけてた。
だが・・・・。
「な、何故壊れぬ。
私の風は最強のハズだ。」
「・・・・愚かですね。自分の能力こそが最強と信じるのは自由ですが、
他人に押し付けるのはいかがかな？と思います。
このゴーレムは超合金と言う最強の鉄で練成されています。
マグマの中でも解けぬ強度があります。
この程度では破壊するのは不可能ですよ♪」
「・・・。それならタロウ殿、貴殿に決闘を申し込む。
種目は風同士で望む。」
「・・・・構いませんが、もし敗れたらどうするのですか？」
「敗れたら私は辞職する。恥を晒してまで働く気は無い。」
言いましたよ。この方。
すべての生徒が居る中で・・・。
良いでしょう。
貴方の最後の授業、派手に散らしてあげます。
決闘前にギトーに怪我や被害は敗北者の負担とする、などの取り決めも行います。
さて・・・。
殺りますか・・・。
自分と生徒に被害が及ばない様にシールド魔法を施しておきます。

コレはアニメに良く出るバリアーをイメージしました。
試しに生徒に向けて軽い火炎弾をブチ込みます。
ウム・・。彼等には埃ひとつ付きません。

さてギトー君を殺りますか・・。

「ギトー殿、先程同様に貴殿に優先権を与えます。
私にいくらでも攻撃を仕掛けてください。」

ギトーはオラに向けて色んな攻撃を開始しますた。
バリアを張ってるので、全く届きません。
十分は攻撃を続けたでしょうか・・。
彼は魔力が枯渇したみたいで、攻撃を止めてしまいました。

「おや、もう終わりですか？
まだお茶も飲み終わっていないのに。」

そう、オラはギトーの攻撃の最中に紅茶をクリエイトし、ティータイムを楽しんでたのです。
ギトーはフヌヌヌヌヌ・・、と面白い顔をしています。

「それでは私の番ですね。しっかりと防御してくださいよ。」

「チョッ、待て。私は魔力が尽きてるのだ。」

「知りません。ゴーレムと決闘で優先権はすべて渡したのです。
今度は私のターンです♪」

ギトーに向けて氷点下の風をイメージした烈風魔法を彼に浴びせます。

もちろん死なない程度に加減しましたけどね♪
二撃程度加えたらヤツはピクリとも動かなくなりました。
何だ。
コレで終わりですか・・・。
生徒に彼の救出を頼み私は校長室へと・・・。

「オスマン殿、遠視の魔法で見てたと思いますからご存知とは思いますが、
ギトー殿から決闘を申し込まれ、彼は負傷。
ああ、決闘前の彼から敗北したら辞職すると言質を頂いておりますので、
負傷の治癒が終わり次第叩き出してください。
あんな決闘ジャンキーは生徒を教える資格はありませんな。」

「そ、そうですな。タロウ殿。ハハハハハ・・・。
分りました。ギトー殿は自己都合の退職として処理します。」

オラはオスマンの部屋から出ると生徒の待つヴェストリの広場へと移動した。
それも一瞬でね。
彼等はギトーを保健室に放り込むとココで待機してたのら。

「生徒諸君、ギトー殿の看護ありがとう。
彼は先程の言質通り、辞職となりました。
さて、コレでは君達の授業が進みませんので、このタロウ・ヤマダが風の模範を
示します。
まず、風の基本、ウインドから・・・。」

前世で烈風のオカンとも対峙してますので、風は徹底的に魂に仕込

まれてます。
今ならオカンでも叩き潰す自信ありまっせ。
何せ魔力がハンパではありません。
もっとも生徒の彼等にはムチャな事は教えませんよ。エエ・・。

（な、何なの・・。あのタロウの魔法は・・・。
ギトー先生の風は私の母のカリーヌよりは威力は少ないとは言え、
普通なら即死レベルの
魔法だったわ。それなのに、攻撃を受けてても平気な顔してたし、
あげくには・・。
お茶を飲んでたのよ。冗談でしょ？？？）

ルイズは自分が召還した彼のムチャぶりに頭が沸いてしまってたのだ。

## 風ヲタとキモ男（後書き）

ギトー、お前の事は。。。
忘れます♪
ギトー解雇編でした。

## ギーシュ君とキモ男君♪（前書き）

ようやく皆のオモチャ、ギーシュ君、爆登場です。

## ギーシュ君とキモ男君♪

ボクの名前はギーシュ・ド・グラモン。
グラモン家の四男坊だ。
薔薇のギーシュとでも呼んでくれたまえ。
多くのレディェがボクを支えてくれるだろう。
さて、今日の授業は中々のモノだった。
アノ、ギトー殿と見慣れぬメイジ教師、タロー・ヤマダ殿の決闘だったのだ。
決闘はタロー殿の勝利だった。
ギトー先生は辞職されるそうだが、自分で言ったのだから後悔は無いだろう。
それよりも・・・。
土メイジの自分としては、あのゴーレムだ。
タロー殿の作り上げたゴーレムにはボクは感動した。
ギトー先生の繰り出す風魔法をすべて受け止めて、傷一つ付かない最強のゴーレム。
防御ばかりだったので、攻撃力を見ていないが・・。
もし攻撃を見れるなら、どうなるか・・。
楽しみだ。
授業が終わり、解散と言う事になったのでボクは彼の元に近づき質問した。

「タロー・ヤマダ先生、先程の授業は素晴らしかったです。
所で・・・。」

「ン？ああ、何か聴きたい事でもあるのかね？
んっと、名前は・・・。」

知ってるけど一応聞いておかないとね♪

「ギーシュ・ド・グラモンと言います。
得意の魔法は土魔法です。まだドットですが・・・。」

「ギーシュ君と呼んで良いか？タロウ・ヤマダです。ヨロシク。」

一応フレンドリーに握手を求めます。

「タロウ先生と呼びますね。ヨロシクお願いします。
質問と言いますか、見せて欲しい事があるのです。」

「何でしょう・・。」

「先生の作り上げたゴーレムの攻撃方法を見たいのです。」

「フム・・。先程の授業では防御ばかりでしたからね。
攻撃方法は色々とありますよ。エエ、色々とね♪」

「そ、そうですか・・。
でしたら課外授業として見せて頂く事は出来ませんか？」

「良いですよ。ただ攻撃するの見せても納得出来ないと思いますので・・。
ギーシュ君、キミの作るゴーレムを破壊して見せます。
四種類の攻撃方法が出ますので四体のゴーレムをキミの持つ魔力をこめて、
頑強に作り上げてください。
準備が出来たら、一体ずつ攻撃します。」

「分りました。所でボクのゴーレムから攻撃しても？」

「モチロンＯＫですよ。カカシでは何の意味もありません。」

分りました、とギーシュが言うと、
彼は全魔力を込めて薔薇の杖でゴーレムを練成し始めました。
相変わらずのワルキューレですな。
それでも昔の彼のゴーレムよりは頑丈そうです。
最初から４体と決めたせいもあるとは思いますが・・・。

「準備は出来ましたか？ギーシュ君。」

「大丈夫です。
ボクの作れる最強のワルキューレとして念入りに作りました。」

・・・・・。
そうですね。
昔の彼のワルキューレよりは強そうです。
まあ良いでしょう。
では遊びましょうか。

「ギーシュ君、キミのゴーレムから私のゴーレムに攻撃を仕掛けたまえ。
五分はキミのターンだ。五分したら反撃を開始する。」

「わ、分りました。タロウ先生。」

そっからはギーシュは必死でゴーレムを操りマジ〇ガーを叩く、蹴る。
刀で刺すと色々と攻撃しました。

ええ、すべてカンカンと軽い音がするだけで傷も付きません。
当然です。マジン〇ーZはスーパーロボット。
この程度で傷が付くのはあり得ません。
相手出きるのはアシュ〇男爵が率いる奇怪獣軍団だけですよ。

「・・・。五分経ちましたね。
では私のターンとします。
ギーシュ君、ゴーレムが傷つくといけませんので分散させて移動始めてください。」

彼は私の指示に従い、ゴーレムを全力で走らせています。
まずは・・。

「ロケットパーーーンチ。」

そう、当時の良い子の皆が度肝を抜かれたアレです。
腕が外れ、轟音を上げてワルキューレに飛び掛ります。

どごーーーん♪

一撃で粉砕。
ま、この程度は当然ですな♪

「ナ・ナ・ナ・ナ・何ですか？それは・・。」

「ロケットパンチと言います。腕が飛び相手を粉砕する攻撃ですよ。
まだまだ続きます。さあ逝きますよ♪」

それからはルストハリケーン、光子力ビーム、そして・・・。

「ブレストファイヤーー♪」

ギーシュは真っ青です。
彼のワルキューレ君は最後のブレストファイヤーで
すべてドロドロに溶けてしまいました。
生徒は全員、このイベントを見学してて固まってました。

「・・・・ボ・ボクのワルキューレが・・・・。」

「・・・ギーシュ君、これで課外授業は終わりとします。
後片付けは頼んでおきますよ。」

放心してる彼を放置して、オラは職員室へと引き上げます。

イジメでしたね。これは・・・。

生徒達は放心してるギーシュを放置して全員、昼ごはんを食べるた
めに食堂へと
引き上げてしまいました。
ギーシュは数時間、その場で固まってたとか・・・。

「・・・・・ボ、ボクのワルキューレがぁぁぁぁぁ・・・・・。」

## ギーシュ君とキモ男君♪（後書き）

ギーシュとのイベントは形を変えて行いました。
今宵の更新はココまでとします。

## 職員室にて・・・。（前書き）

ついでにキモ男のキモ男たるべき話を。
全然キモク無いチートじゃんと思ってる方。
キモ男は変わっていません。
変態ヲタですよ。

**職員室にて・・・。**

タロウでっす♪

ギーシュとのイベントを形変えてしまいましたが、アレは迷惑なイベントなので、
ま、ヨシとしましょ。
さて、お昼はどうしましょう。
あの騒ぎの後ですし、アルウィーズに行くと大騒ぎになると思いまして・・・。

シエスタを見かけたので、彼女に厨房に案内して貰いますか・・・。

「シエスタさん♪」＜ソコのギャラリー、キモッとか言わないでね。キモ男ですが・・・。

「アラ？タロー様、今朝は色々とありがとうございました♪」

シエスタさん、ご機嫌ですね。

「どう致しまして。所でお願いがあるのですが。」

「何でしょう。私に出きる事なら何でも致します。
ええ、何・で・も・ね・♪」

オラはこの何でもと言うのが文字通り、何でもを意味してるとは気づいていなかったのです。
シエスタさんは既に肉食獣のスイッチが入っていたのですよ。
ガクブル・・・。

「色々とやらかしてしまいまして、食堂で食べるのがアレなんですよ。
で、量も多いので出来ましたら厨房の方の賄いを頂けないかと思いまして。」

「アラ？そんな事で宜しいのですか。
でしたら私が調理人のマルトーさんに頼んであげますわ♪」

おお、マルトーのオヤジも居たか・・・。
彼は好きなキャラなんですよ。

シエスタの案内で訪れた厨房はかつての厨房と変わっていません。
中に居るメンツもかつてのままです。
懐かしいですね・・・。
色々と世話になりましたから。
少しホロリとした感傷に浸ってると、シエスタが怪訝に思ったのか
質問して来ました。

「タロー様、ココが厨房ですよ。」

「あ、ああ、そうですか。いい匂いがするなと思ってたトコです。」

「・・・そうですか。では入りましょう。」

シエスタの先導で厨房に入るとマルトーを始めとする厨房の料理人
達が、
デザートの製作に大忙しでした。
いいのかしら・・・。
こんな時に来て・・・。

「マルトーさん、この方がタロー・ヤマダ殿です。
お昼はコチラの賄いを出して欲しいそうですが。」

「ん？おお、アンタがあのギトーを叩き出してくれた新任の教師か？
今、オレ達の間でウワサしてたとこだぞ。良くあのギトーを追い出してくれた。
感謝するぞ。」

何かしてたのですかね。ギトーさん。
凄い嫌われっぷりですよ。
前世でもココまでは嫌われて無かったと思いますが。

「タロー・ヤマダと言います。マルトーさんで宜しかったですか？
お世話になります。」

「いや、世話になったのはオレ達だ。
あのギトーにはオレ達は散々な目に遭わせられたからな。
魔法も使えないオレ達に、ヤタラと風がどうのとか、標的にして怪我させられたりとか。
惨い事ばかりしやがって。
オスマン校長に訴えても聴いてくれなくて困ってたんだ。
だがアンタがヤツを潰してくれたおかげで、オレ達の被害は終わった。
何でも徹底的に潰してくれたそうだな。
オレ達の盾として戦ってくれて本当に感謝する。
なぁ皆。」

「「「そうですぞ。タロー・ヤマダ殿はオレ達の盾です。」」」

「お前の事はオレ達の盾と呼ぶ事にしよう。
オレは嬉しくてお前にキスしたくなったぞ。」

「いや・・自分はノーマルなのでヤローからキスされるのはイヤです。
遠慮しときます。
それよりも賄いを頂けませんか？
昼からも授業が入りますので腹ペコでは働けません。」

「おお、忘れてた。今すぐ準備してやる。少しだけ待て。」

マルトーは賄いとは思えぬスープとサラダ、そして一番いい部分のパンを出してくれた。
腹も膨れたので、オレはマルトーに礼を言い、厨房を辞すると広場の片隅で休む事にした。

「フー、疲れた。
相変わらず飛ばしてくれますよ。マルトーさんは・・。
ん・・いい素材となる木が落ちてますな。
ちとオモチャでも作りますか・・。」

オレはそれを拾うと、職員室の自分の机に帰り、そこで木材を加工する事にした。

「んっと・・。テファはさすがにヤバいので・・。
見られても大丈夫なのに加工すっか。
ンジャ・・・・・・。」

しばらくオラは木材の加工とクリエイトに熱中してた。
思い浮かべたのは、現世で話題となってた某アニメ。

ホラ、友達が居ないとか言う癖にリア充してたアレのキャラの妹ですよ。
あの子ならこの世界に居ても不思議では無いキャラです。
フフフフフフフフフフ・・。
我ながら快心の傑作です。
見事にＫＯ鳩ちゃんとンコシスターの絡みを作れました。
あの二人の絡みはホンマに和ませて貰いましたからね。
最終回だったのが残念。
有中部で動画見れますから、二期も見れるとは思いますが。
ン？？？？
何で皆様、コチラをガン見してるのですか？？？？？

「タ・タロウ先生、それってタロウ先生が作られたのですか？」

「ええ、私の趣味の一環ですよ。キリッ♪」

「素晴らしい出来ですね。売り出しても絶対に売れると思いますが・・。」

誰でしたかしら？
原作にも居なかったキャラの先生です。
彼の背後からは私と同じヲタの空気が漂っておりますが・・。

「すいません。まだ同僚の方の名前を存じ上げていませんので。
宜しければお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「おお、名乗るのを忘れてました。
私は風系統の魔法教師助手をしてます、アキバ・オオスと申します。
」

何ですか？モロにヲタの聖地を使ったっぽい名前は。
しかしこの世界でアキバなんて・・・。
何て素晴らしいのでしょ。
そう言えば風の助手と言いましたね・・・。聞いておきましょ。

「風の助手をされているのですか？先程ギトー先生は退職されましたが。」

「モチロン聞いています。で、次の風教師はタロウ・ヤマダ殿と決定しました。
貴方が私の上司となります。ヨロシクお願いします。」

彼が助手ですか・・・。
でしたら仲良くしておくべきですね。
では、コレは彼に差し上げますか。
どうせ片手間に作り上げた品ですし・・・。

「分りました。アキバ・オオス先生。宜しくお願いします。
私がタロウ・ヤマダです。
で、どうでしょう。お近づきの印にこの人形をプレゼントしたいと思いますが。
迷惑でしょうか？」

すると・・・。

「ほ、本当にいいのですか？いや、素晴らしい出来ですし、見るだけでも幸せだと
思ってたのです。まさか頂けるとは・・・。
ああ、夢の様です。」

チーン♪
この方もヲタク確定です。
同僚となる方ですし、色々と楽しく仕込みますか・・。

その後アキバ君に色々とヲタ情報を話したり、フィギィアの事を教えたりして楽しい一時でした。
やはりこの世界も「染める」べきですね。
リア充となろうが、ヲタは不滅です。
またフィギィアショップ作るどぉぉぉ。

あ、始業時間だ。
次の授業はシュヴールズ先生だな・・・。

## 職員室にて・・・。（後書き）

タロウはリア充になってもヲタは止めません。
また店を作ろうかな・・・。
ふぅ、いい仕事でした。

## ルイズと彼（前書き）

彼が登場です。

## ルイズと彼

タロウです。
いやアキバ先生ってマヂでヲタの素質が在った方でしたよ。
色々と情報を聞き込むと、幼女が大好きだとか。
もちろん実際に手を出すとかは妄想もしていません。
ただ眺めて愛でるのだけで満足してたそうで。
この学院は幼女に近い生徒も多いので、中々良い環境だとか・・・。
アキバさん・・。
マヂで手は出してはダメですよ。
この世界の法律がどうかは知りませんが、犯罪には変わりませんから・・。

さて授業の見学でもするべ・・・と考えてたら、背後から・・・。

「タロウ・ヤマダ先生。」

・・・この鈴宮ボイスは・・桃髪爆発ツンデレ娘か・・・。

「ン？どうしました。ルイズ嬢。」

「午後の授業は使い魔のお披露目を兼ねているのです。
で、あのぉぉぉ・・・・。」

「分りました。皆まで言わなくても結構です。
では校長室に行きましょう。
あそこで召還する約束でしたからね。」

さて・・彼を呼び出すか・・・。

この世界でもルイズの虚無は発露させないつもりです。
お子様が戦争の道具にされるのは悲劇ですもんな。
悪い目は潰しておくべきです。
ゼロ様にお願いして彼女の虚無体質を剥奪しておかないと・・・。

オラはルイズ嬢を引き連れ、校長室に到着♪
一応ノックします。

「オスマン校長、タロウ・ヤマダです。
ルイズ嬢の件でお伺いしました。」

「タロウ殿か？入りたまえ。」

許可出たので入ります。
そう言えばマルトーのオヤヂの訴えを無視してたっつーてたな。
少しお灸を吸えておくか・・・。

中にはマチルダさんとオスマンが居ます。

「ルイズ嬢が昼の授業で使い魔お披露目があるとかで、
使い魔を献上する約束を果しに来ました。」

「おお、そうかね。
ミス・ヴァリエール。良かったね。」

「ハイ。でもどんな使い魔が来るのでしょ。」

「チョイお待ちを。
あまり時間もありませんのでチャッチャッと片付けてしまいますね。

」

オラは頭の中で「彼」をイメージし、彼を異界に呼び出す事にした。

「Ｐｅｓｏ２、出でよぉぉぉ。」

激しい光が出現。

ガン見してたオスマン達は、

「目がぁぁぁぁ。」と光に目を射られたらしいっス。

お約束ですな♪

やがて光が収まると・・・。

そこには「彼」が居ました。

「クエッ？」

「彼がルイズ嬢の使い魔となって頂くペソペソです。

Ｐｅｓｏ２とでも呼んでください。

少しお待ちくださいね。彼に納得してもらいますので。」

オラは念話で彼に話しかけ、ルイズの使い魔として遊んでヤレと頼んでた。

ペソペソはメシとフロはあるべな？と聞いて来たので冷蔵庫の部屋も設置したる。。

と、約束したら彼は納得してくれた。

「・・・終わりました。
彼の名はペソペソ。異界に居る温泉ペンギンです。
ルイズ嬢、彼の居室は私がプレゼントしますので夜にお邪魔しますよ。
ああ、彼はお風呂が大好きですので、
毎日の入浴は必ずご一緒にお願いします。
男性っつーても彼なら女性のフロでも大丈夫でしょ？」

ルイズはフリーズしてたが、やがて・・・。

「コ、コ・コ・コ・コ・・・・・」

「コケコッコーーーー♪」

思わず突っ込んでしまいました。

「違うわよぉぉ。私はニワトリでは無い。
コレが私の使い魔になるの？
何て・・・・カワイイ♪」

やはり双月の世界でも女性のストライクゾーンは変わりませんね。
お子様や女性はペンギンが大好きです。
普通のペンギンなら過酷な人間環境で生きるのは大変ですが、
あの桂木亭の夢の島で、生き抜けるタフな彼なら、
このハルケギニアで立派に戦ってくれるでしょう。
モチロン愛玩ペットとしてですよ。

「彼は魚介類が好物ですので、食事の時はご一緒に与えてください。
さっ、ペソペソ。お前のご主人様、ルイズ嬢に挨拶しなさい。」

彼はクエッと言うとペタペタとルイズに近づき、右手？を差し出す。
「ホラ、ルイズ嬢、彼が挨拶してますよ。握手して自己紹介してね♪」
「クエックエッ♪」
「ペソペソ、
私が貴方のご主人様となるルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。
ルイズでいいわ。
ヨロシクね。ペソペソ。」
「クエックエッ♪」
ウム・・。おおむね好意的に交流出来そうですね。
やはり彼女には彼を使い魔とするよりは、こう言う動物を使い魔にするのが一番ですよ。
さて、使い魔の件はコレでヨシとして・・・。
オシオキして置きましょう。ヤツに・・。
「ルイズ嬢、彼を連れて教室に行きなさい。
歩くのが遅く思う時は抱いて歩いてもＯＫです。」
「だ・だ・だ・だ・・・抱いてもいいんですか？
ンナ可愛い生き物を。」
「貴女の使い魔ですよ。大切に扱ってくださいね。」

「モチロンです。タロー先生、ありがとうございました♪」
ルイズの私に対する好感度は少しは上がったみたいですね。
ま、いいでしょ。
さて、彼女が退室したら・・。

「オールド・オスマン殿。
自分は本日、厨房で賄いを頂いたのですよね。
そこで・・楽しい話を伺いました。」

「な・・・ナニもしてないぞ。ワシは。」

「ええ、ナニもしてないですね。本当に。
貴方はこの学院のトップですよね？」

「そうじゃが・・・。」

「それなのに厨房の調理人がギトーから苛められていると言う陳情を無視してたとか・・。
彼等はギトー退職を聞き大喜びで泣いてましたよ。
どうしてトップである貴方は彼等の陳情をシカトしてたのですか？
ロングビルさん、ヤツを取り押さえてください。」

「フフフフ♪タロー様、了解です。」

オスマンが脱走する前に彼女にヤツを捕縛して貰いました。

「や、止めてくれぇぇぇ。」

「彼等の苦しみを味わって貰いますか・・。

魔法無効、そしてヤツの魂を地獄の煉獄に一日封印。」
オスマンはピクリともしなくなり、動かなくなりました。
「タロー様、彼は・・・。」
「ヤツの魂を一日、地獄の煉獄に封印しときました。
平民の皆様の苦しみの一部にしかなりませんが、彼も懲りると思います。」
「ま、それは良い事を。
では彼の管理は私がしておきます。
明日まで放置しといて良いのですよね。」
「ええ、肉体は生きてますので。ま、多少垂れ流したら掃除だけお願いします。」
「お任せください♪」
オスマンは翌日、現世に戻るまで地獄のオニに叩き潰され煮られ焼かれて・・。
地獄ツアーを楽しんで来たらしい。
数日ガクブルが止まらなくなり、オラの顔見たら逃げる様になりました。
くけけけけけ。
少しは懲りただろ・・。

## ルイズと彼（後書き）

彼とルイズの生活に幸多からぬ事を。
オスマンは不憫ですね。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8151z/

キモ男　カンバ〜〜ック♪

2011年12月28日07時56分発行